

春風の候 宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部会員の皆様には益々ご清福の段、大慶に存じます。

日頃より皆様には、当支部運営に際して物心両面に亘るご支援を賜り、心よりの感謝と深甚なる敬意を表する次第です。

さて先月2日に開催した平成29年度支部総会に、ご多忙のなか20名を超える支部会員にご参加頂いた上、ご来賓等も熊谷新田原基地司令を始め、植村地本部長、稲田24連隊長、古越43副連隊長と、宮崎県内所在各部隊長等にご臨席賜りました。

ご出席頂きました皆様にはこの場をお借りして、改めての御礼を申し上げます。

また11日の建国記念祭(紀元節)は寒風吹きすさぶ中、宮崎神宮拝殿で厳かな神事が催行され午前10時から杉田宮司の祝詞奏上に続き、2人の巫女による「悠久の舞」及び「日本剣道形」が奉納されました。

その後神宮会館に場所を移して皇學館大学の松浦教授からご講演を頂き、160名を超える参加者からは「本県にまつわる天孫降臨や神武建国への理解が深まった」などの、感想を頂いたところです。

17日には、自民党宮崎支部新春懇談会に「ひげの隊長・佐藤正久参議院議員」のご来宮を仰ぎ、ご講演が始まる1時間ほど意見交換をさせて頂きましたが、佐藤氏は現役自衛官時代にゴラン高原やイラクのサマーワなどに先遣隊長として派遣され、現在は国会議員として南スーダン等にも直接出向いた上で、現地の状況なども熟知しておられ、ご講演も実体験に基づく大変迫力のある内容でした。

21日の櫻井よし子氏が主宰する「国家基本問題研究所月例会」は、永田町の星陵会館で開催され、田久保忠衛日本会議会長、神谷万丈防衛大学校教授、熊谷亮丸大和総研上席研究員など錚々たるメンバーによる「トランプ政権と激動する世界情勢」の演題で、誠に興味深いパネルディスカッションを拝聴したところです。

今月も小川先生のメルマガから抜粋して、大変面白い記事を転載致しますので、何卒ご一読賜れば幸いです。

・基準なき「情報開示」の果てに…

日米首脳会談、やっと首相の個性を前面に出した安倍政権のもと、大きな成果を上げることができたと評価しています。

ゴルフをしたことなどを批判する向きは、そのことだけで世界に通用する政治、外交、ビジネスをした経験に乏しいことを白状しているようなものです。

そのおりもおり、北朝鮮が弾道ミサイルを日本海に向けて発射しました。

色々な見方はできるでしょうが、ここはひとつにまとめておきましょう。

金正恩朝鮮労働党委員長は、「トランプさん、安倍さん、オレともディール(取引)しようよ。このミサイルでどうだ！」と言っているのです。

これを無視したとき、金正恩さんがどのように態度を変えてくるのか、変えないのか、注目です。

そこで今回は、防衛省・自衛隊の情報開示についてです。

南スーダンでのPKO(国連平和維持活動)に派遣されている陸上自衛隊の「日報」の件で稲田朋美防衛大臣がつるし上げ状態になっています。

昨年、ジャーナリストから出された情報開示請求に対して、防衛省側は「廃棄されていて存在しない」と回答していました。

ところが、自民党の河野太郎衆議院議員の求めに対して、統合幕僚監部の関係部署に電子データの形で残っていたことを明らかにしたのです。

それを受けてかわされた「戦闘」という文言をめぐる国会での攻防は、バカらしくて取り上げる気にもなりません。

しかし、開示された文書は例によって黒塗りが目立つものでした。

もっとも、黒塗りにになっている「警備態勢」などの個所も、専門家が読めばほかの個所とのあわせ読みで内容が推測できるレベルだったのですから、全くの「勘」で黒塗りしたことが明らかなものでした。

そんなことを、ある研究のための会合で陸海空自衛隊の高級幹部と話し合う機会がありました。

責任ある当事者である高級幹部たちの見解は、開示するかどうかの基準が明確でないから、担当者はのちのち責任を問われないようにということで、なんでもかんでも黒塗りにしてしまう、というものでした。

その会合では、きちんと基準を決めて、可能な限り情報開示を図ることが国民との信頼関係の構築には不可欠、ということになり、「国民に知らせる必要などない」と怒鳴るような猪武者がいないことに安堵したものでした。

私はといえば、そんな議論を進めながら、情報開示に関する極端な例を思い出し

ていました。

1978(昭和53)年初夏、おりからの「ソ連軍が北海道に侵攻するぞ」といった北方脅威論を受けて、講談社『週刊現代』にノンフィクション作家・佐瀬稔さん(故人)の『北海道の11日戦争』を連載したときの事です。

最初のうちこそ、「ソ連の脅威を煽るような企画は困る」と取材協力を渋っていた陸上幕僚監部ですが、態度を一変させたことがありました。

編集部自身の予想を超えて連載が好評で、最初は3回か5回の短期集中連載で終わる予定が、なんと13回まで延ばされるほど注目を浴びた結果です。

時のT陸上幕僚長は、広報の窓口の陸上幕僚監部広報班とは別の担当者として北部方面総監部の1佐を指名し、なんと秘密に指定されている「幕僚諸元」まで出してきたのです。

幕僚諸元の中身の一例を挙げれば、155ミリ榴弾砲は攻撃のとき1日に何発、防御のとき1日に何発といった具合に、武器ごとに砲弾の数が決まっており、それが幕僚(参謀)に必須のデータとして文書化されているのです。

これを見るだけで、敵は自衛隊の手の内を知ることができますから、扱いが慎重なことはいうまでもありません。

これをT陸上幕僚長は、「丸くする」形で記事に使ってよいというのです。

丸くするとは、1日あたり143発射撃するとあるものを、1日あたり150発射撃するといった具合に、少しぼかすことです。

T陸上幕僚長は、国民が軍事に関心を抱く好機と考え、私たちの連載企画にリアリティを持たせたほうがよいと考えたわけです。

当然、そんな事情など知らない防諜部隊の中央調査隊は大騒ぎとなり、担当者の私に対しても尾行・監視、そして盗聴が行われることになりました。

そんな秘密事項でも、トップの大所高所からの戦略的判断で外部に出ることがある一方、世界中の軍事関係者が知っており、『自衛隊装備年鑑』(朝雲新聞社)にも明記されている陸上自衛隊の火砲の射程距離は秘密に当たるから記事化してはならないと、陸幕広報室の2等陸佐が言ってきたことがあります。

当時、私は出版社の小学館から依頼されて『陸上自衛隊の素顔』という単行本の監修者を務めていました。

ところが、小学館の担当編集者から「陸上幕僚監部の広報室から、203ミリ榴弾砲の射程距離がグラビアの写真説明に出ているが、あれは秘密事項だから削除するように」と求められたと連絡があったのです。

詳しくは言いませんが、私は陸幕広報室の2等陸佐に「秘密扱いにする根拠を示せ」と厳しく問いました。

々すぐにわかったのは、この2等陸佐は後方職種の人間で、第一線が使う武器の性能などは全て秘密だと思い込んでいたのです。

ご紹介した二つのケースは、秘密保全とは、そして情報開示とは、「そのようなもの」だとわかるエピソードでしょう。

そして、情報開示とは、いくら自衛隊が国民との信頼関係を構築するためにできるだけ開示したいと思ったとしても、基準が明確でないと上手くいくとは限らないことを示す好例かもしれません。

明確な基準が存在せず、また、情報開示に関するトレーニングが行われていないところでは、いきおい、「いっそのこと『のり弁(黒塗り)』にしまえ」ということになるのは避けられないと考えるべきなのです。

毎日新聞エルサレム支局長の大治朋子さんは2002年と2003年、2年連続で日本新聞協会賞に輝きました。そのおりの受賞理由は、当時の防衛庁・自衛隊の情報開示と情報収集に関するスクープでした(2016年12月8日号「日本にもこんなに優れた記者がいる!」)。

2002年は「防衛庁による情報公開請求者リスト作成に関するスクープ」、2003年は「自衛官募集のための住民基本台帳情報収集に関するスクープ」(代表受賞)です。

防衛省・自衛隊は、情報開示の在り方などについて大治さんを講師に招いて研究会を行うと参考になる点が少なくない、と提案しておきました。(小川和久)

秘密保全と情報開示は両刃の剣のようですが、昨今の国際・国内情勢はその線引きを明確にせねば、国内外の理解を得られるはずもありません。

愈々花粉症の季節到来に付き、罹患者は呉々もご自愛専一にお過ごし下さい。

平成29年3月1日

宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部長 小倉和彦

